



さいたま市立宮原小学校 学校だより



令和8年9月30日 第6号

学校教育目標

・たがいに努める子(やる気) ・たがいにきたえる子(元気) ・たがいに手をとる子(勇気)

天動説から地動説へ

井 上 雅 史

先週の金曜日、今年度初めての通知表を、一人ひとりの児童に担任から手渡しました。昨年度から通知表を年2回の発行としました。10月は、この通知表をきっかけに、学年前半の取り組みをじっくりと振り返り、学年後半に向けて、一人ひとりが新たな見通しと目標をもつ時期にしてほしいと思います。

さて、先週の金曜日はもう一つ、中秋の名月(十五夜)でもありました。うっかりしていて、当日私は月の姿を確認できませんでしたが、皆様はいかがだったでしょうか。今の時期、4年生の理科では、月が日によって形が変わって見えたり、月や星が一日のうちでも時刻によって位置が代わったりすることについて学習をしています。更に、10月30日には、宇宙劇場へ出かけ、プラネタリウムで星空の学習も行います。また、5年生になると、館岩少年自然の教室で(天気次第ではありますが)映像ではないリアルな星空を眺め、その美しさと宇宙の広大さを肌で感じる体験をします。(今年の5年生は、素晴らしい星空を眺めることができました。)

月や太陽、星々が動いて見えるのは、地球が動いているためという地動説は、現在は常識です。しかし、2世紀(100年代)頃の古代ローマの学者、プトレマイオスが宇宙の中心に地球がありその周りを太陽や月、星々が回っているという天動説を唱えてから、長い間、人々の常識は天動説でした。16世紀(1500年代)頃から科学的な観測結果をもとに地動説をとる天文学者たちが現れましたが、科学的に確認され、世界中が最終的に地動説を受け入れたのは、19世紀(1800年代)になってからだそうです。なぜこんなにも長い時間がかかったのでしょうか。

むかしの人は、みんな、太陽や星が地球のまわりをまわっていると、目で見たまに信じていた。これは、一つはキリスト教の教会の教えで、地球が宇宙の中心だと信じていたせいもある。しかし、もう一つは、考えてみると、人間というもの、いつでも、自分を中心として、ものを見たり考えたりするという性質をもっているためなんだ。(中略)教会で教えられることをひっくり返す、この学説(地動説)は、危険思想と考えられて、この学説にみかたする学者がろう屋に入れられたり、その書物が焼かれたり、さんざんな迫害を受けた。世間の人たちは、もちろんそんな説をうっかり信じてひどい目に合うのはばからしいと考えていたし、それだけでなく、自分たちが安心して住んでいる台地が、広い宇宙を動きまわっているなどという考えは、薄気味が悪くて信じる気になれなかった。そして、今日のように、小学生さえ知っているほど、一般にこの学説が信奉されるまでには、何百年という年月がかかったのだ。人間が、自分を中心としてものを見たり考えたりしたがる性質というものはこれほどまで根深く頑固なものだね。

【吉野源三郎著「君たちはどう生きるか」より抜粋】

この文章は、1937年に出版された少年向け図書の古典ともいわれる「君たちはどう生きるか」より抜粋しました。主人公のコペル君の心の成長を感じ取ったおじさん(母の弟)が、自分のノートに書き留めていた文章です。そしてこの話には、天文学から発想を広げた哲学的な続きがありますので紹介します。

子どものうちは、どんな人でも地動説ではなく、天動説のような考え方をしている。(中略)自分が中心になって考えられている。それがおとなになると、多かれ少なかれ、地動説のような考え方になってくる。(中略)しかし、おとなになるとこういう考え方をするというのは、じつは、ごく当たり前のことにすぎない。人間がとかく自分を中心として、ものごとを考えたり、判断するという性質は、大人のあいだにもまだ根深く残っている。(中略)しかし、自分たちの地球が宇宙の中心だという考えにかじりついていて、人類には宇宙の本当のことが分からなかったと同様に、自分ばかり中心にして、ものごとを判断していくと、世の中のほんとうのことも、ついに知ることができないでしまう。大きな真理は、そういう人の目には、決して映らないのだ。

【吉野源三郎著「君たちはどう生きるか」より抜粋】

自分中心の視野の狭さで物事を見ていると、自らの成長を妨げ、世の中の真理を見えなくしてしまいます。自分とは異なる視点からの意見にしっかりと耳を傾け、相手を尊重して受け入れること。そして、新たな気づきを得たら、時には恐れずに自身の考えを修正していくこと。この柔軟な思考の転換こそが、正解のないこれからの時代を生きていく子どもたちが、多様な価値観を持つ人々と協働してよりよい未来を切り拓くために必要になっていくのではないかと、この本から、改めて考えさせられました。